

子ども の 文化 (その三)

—— 児童文化にかかわる子どもの役割 ——

本 田 和 子

◆文化の共有者、子どもとおとな

子どもは、おとなの生産になる文化財を受け入れるだけの存在ではなく、おとなによって伝えられる文化価値をただ受容するだけの存在でもない。それどころか、児童文化の形成に關しては、むしろ作り手としての主要な役割をになつていた。

伝承童話が形成され、伝承される過程をたどつてみても、あるいは、玩具が市場に現われるまでの経過をみても、子どもは、子どもが果たしてきた役割の大きさに、あらためて驚かされるのである。まだ児童文化という概念が形成されず、児童文化財の生産が産業機構の中に入りこんでこなかった古い時代には、子どもは自らの手で自らの文化を作り出していたのである。

ところで、「自らの手で自らの文化を」という表現は必ずしも

正確ではない。というのは、「児童文化」という概念を成立させて子どもの文化を特別のものとする以前には、子どもとおとなは文化の共有者であったからである。共有する文化の中に、子ども自らが「自らのもの」と感じる部分があったことは確かであろうし、大人のがわで「あれは子どものもの」ととらえることがあつたに違いない。しかし、全体として、文化は共有されていたのであつた。

次に、興味深い一つの物語、ローズマリ・サトクリフによる「太陽の戦士」を例に引きながら、考えてみることにする。

——ドレムの心のなかには、奇妙なことが起こりつつあつた。ドレムが子犬の小さな胸の下に手を入れてすくい上げると、四本の足がドレムの手首のあたりにたれさがつた。その子犬もほかのき

ようだいたちのように、やっぱりネズミみたいだった。まだしめ
っている毛皮はネズミの皮のようにやわらかで腹はもも色をして
いた。毛足はまだ短くて、ほとんどはだか同然だった。ドレムの
手のひらに新しい生命が脈打っているのが、感じられた。この子
犬の胸とのどには、もう小さな銀色の炎のような白いブチがみえ
ていた。子犬はなき声をたてた。そのやわらかな鼻づらが、あた
たかい母犬の乳をもとめて、ドレムの手をつつきまさぐった。ド
レムはそれを愛情のこもったまなざしで眺めた。この子犬にすっ
かり心をうばわれてしまったドレムは、それを手に入れたいと願
う気持ちでいっぱいになっていた。――

ローズマリ・サトクリフは一九五〇年以降、現在に至るまで英
国における現役の児童文学作家として活躍している女性であり、
特に「過去の人々の生活を再現すること」をねらいとして、歴史
小説にすぐれた筆をふるっている。この作品は青銅時代のブリテ
ンを舞台として、片腕の少年ドレムを主人公とする物語である。
肉体的に障害をもつ子どもが、それを克服し、部族社会の中に自
分の地位を獲得していく過程が、巧みな物語構成の中に、いきい
きと描かれている。

ところで、さきに引用したのは、主人公ドレム少年が、尊敬す
る片腕の戦士タロアの家に生まれた子犬に対して、はなれ難い愛

着を感じ、胸をしめつけられる思いでその子犬を熱望する場面
である。この子犬は、優秀な獵犬ファンドを母とし、野生の狼を父
として生まれている。この部族の獵人たちは、ファンドの子犬な
らどんな取り引きにも応じるというくらい、価値の高い子犬なの
である。

しかし、老戦士タロアは、その子犬を九歳の少年ドレムに売っ
てもよい、と申し出る。ただし、その値はドレムが自分の投げ槍
でしとめた鳥一羽ということであった。つまり、片腕のゆえに、
弓を引くことのできない少年にとって、投げ槍に熟達すること
が、唯一の戦士として生きる道であった。タロアは、ドレムに、
その腕前を示すことを要求したのである。

ドレムは、翌日、一羽の美しい白鳥をしとめた。少年にとって
最初の獲物、あまりにも大きくて、子どもの手では運ぶこともで
きないその鳥は、限りなく美しく輝いてみえる。

――ドレムは鳥をつかむと、トネリコの本のところまでひっぱっ
ていった。かなりの時間がかかった。本能的にドレムは白鳥をい
ためまいとつとめていたからだ。それはドレムの獲物だったし、
今となつては動かぬ美しさではあったが、まだ美しかったから。
ドレムは鳥をタロアに見せるまでは、その美しさをたもたせてお
きたかったのだ。少しずつ少しずつきざられるたびに、草の上

であおられてひろがる大きなつばさを、ドレムはもとどおりにした。とうとう白鳥はトネリコやイグサ、野生のアヤメがしげるなかにおかれた。

しげみの奥ふかく鳥をひきずりこむと、ドレムはできるだけ場所をとらないように、大きなつばさをたたんだ。それから花の咲いている茶色のイグサや、刃のようなかたちをしたつめたいアヤメの葉をひとかかえほどもひきぬいてきて、白鳥の上に厚くかぶせた。こうしておけば、カササギやカラスに、白いつばさのかがやきがみえないだろう。――

しかし、こうした勝利感はずぐにゆらぎ、不安におちいる。それは、タロアの家に部族の有力者が新しい銅鍋を持って、子犬と交換してほしいとやってくる。そして、その有力者はドレムの獲物を一笑に付したのであった。

しかし、タロアは少年との約束を守り、「片手の指の数ほどの銅鍋よりも、この白鳥こそ子犬の値にふさわしい」といつてくれる。ドレムは、より激しく、より甘美な勝利感に目もくらむ思いで子犬を連れて帰るのである。

――そうしてドレムは、白亜の斜面を家のほうへのぼっていった。猟犬をだき、まだ夏のけはいののこっている暗闇を歩いてい

った。子犬はあたたかく、たしかに生きていて、思いがけず重かった。勝利の歌があとからあとから自然にわき出てきた。

「猟犬を買ったんだぞ！大きな白鳥で――じぶんの投げた槍でやつつめたんだ！猟犬を買ったぞ！おれのだ。オオカミの血がまじってるんだ。こいつは部族のなかでいちばん足ばやでいちばん強い猟犬になる。そいつがおれの犬なんだ！だっておれはちゃんと値段だけのものを払ったんだから――このおれがだ。猟犬のドレムが――じぶんのしとめたえもめでな！」――

物語は、この後、十二歳から十五歳までを、家をはなれて「若ものの家」で戦士となるための訓練を受けるドレムを描き、さまざまな試練を経て、「狼殺し」に失敗して一度は部族から追放されるという苦難にも会いながら、十六歳で成人式に連なり一人前の男性として、部族社会に迎えられるところで終わっている。

作品の読者は、小学校の上級から中学生くらいの男女であろうか。したがって、幼児とは直接には関係のない文学である。この物語を長々と引用したのは、何よりも、描かれている「子どもの生活」が興味深かったからである。

この作品は、私どもに「子どもが生きる」ということを、しかも「真剣に生きる」ということを、きわめて典型的な形で示してくれている。読者を魅了し、感動させるのは、まさしく、物語の

中で少年が真剣に生の戦いを戦いつつ成長していく過程である。このように幼年期から青年期にかけて成長していく人間を追求することは、十八世紀以来の英文学の主要なテーマの一つである。確かに、多くの作家がさまざまな作品でそれを試みてきた。おそらくは、そこに最も凝縮された形での「生の営み」がみられるからであり、理想的で典型的な形の「人間」が見出せるからであろう。

この作品は、青銅時代のブリテンという荒々しい風土の中で、征服者部族の男子は「狼殺し」の課題を果たすことによって、一人前の戦士として部族社会への参加が許され、それに失敗すれば、被征服者の仲間に入って羊飼いとして暮さねばならないという、きびしい社会的秩序の下に、主人公を生活させる。そして、その主人公の生きぬこうとする努力が、痛いまでに読者の胸にせまってくるのである。

物語の中で、少年は、必要なものを手に入れるために自ら投げ槍を投じて、獲物をしとめている。そして、少年が手に入れたのは、現在の瞬間的欲望を満足させるためだけの玩具ではなく、生涯の獵の伴侶たる一匹の子犬であった。しかし、子犬を得たことは、少年にとって、将来のための単なる準備ではない。それは、現在の満足と、現在の生の充実に連なるものであり、たとえようもない歓喜なのである。それでいて、少年が、現在の瞬間を楽し

んでいることは、将来の生をより確かにすることと同一なのである。

この物語の世界では、子どもとおとなを区切る明確な線が、「狼殺し」と「成人式」という形で引かれている。しかし、このような社会的な儀式が必要なほど、子どもの成長の過程は、単純でまっすぐなおとなへの道であった。子ども時代というのが、囲われた特別の部分ではなく、子どもの世界とおとなの世界とは対立する二つのものではなかった。文化のまだ開けない社会にあって、子どももおとなも、まさしく、真剣に素材に、共に生を営んでいたのである。

そして、ここには、同じ文化の共有者としての、子どもとおとなが存在している。狩獵、特に狼を殺すことが価値ある行為であり、太陽神への帰依が部族の信仰であり、緋色のマントが戦士の象徴であるような、同じ文化を子どももおとなも呼吸している。

もちろん、これは物語であって、ドレムをめぐるさまざまなことからは、作品の上の事件にすぎない。しかし、おそらくは、近代以前の社会、特に歴史をさかのぼればさかのぼるほど、子どもの生活と文化はこのような次元に成立していたのではないか。

子どもの生活を、「基本的な生活・労働・学習・遊び」の四つからとらえようとする立場がある。そして、労働の占める割合いが減って、逆に学習と遊びにあてられる時間が増大することが、

子どもの生活の近代化だとするのである。確かに、学校教育制度の普及した近代以降の社会では、子どもたちの労働にさく時間は減少し、純粹に学習のために費やす時間が増大している。子どもたちは、弟妹の守りをしたり、羊を追ったりして、一日を過ごすことはなくなつたし、ましてや、工場労働などに幼い肉体をすり減らすこともない。そして、子どもたちに、学習と遊びのために十分な時間を提供し、それを成長のための必要期間として確保しようとする努力が続けられている。

こうみると、物語の中でドレムの生きている世界、すなわち、自らの欲望を満たすためには自らが汗して獲得せねばならない生活、しかも九歳の少年が、おとなと全く同じ狩猟という方法でそれを行なうという生活は、子どものために遊びと学習を保証しようという近代の福祉の精神からは、あまりにもほど遠いものに見える。確かに、未開で、野蛮な社会であった。

しかし、そんな中で、ドレムはいきいきと精一杯に、自らの生活を充実させ、成長の歩みを続けている。そして、彼を包む大人たちの眼も、荒々しいがあたたかく、愛情に満ちている。

ドレムの生きた社会は、子どもとおとなの間に差異を自立たせ、そのちがいで両者をとらえるよりも、むしろ共に生きる人間としての共通性で、両者がとらえられる時代であった。そのゆえに、特別に保護されたり、かこいをめぐらされたりすることな

く、子どもとおとなは、あるがままにまじり合い、いっしょの生活をのびやかに営んでいたのである。そして、子どもは、生活のどんな部分からも、「それをするこゝ自体の楽しみ」を見出し、結果を意識しない無償の行ない、すなわち「遊び」として、それらの営みを続けていたのである。

素朴な自給生活の中で、人間の生き方は、幼い子どもの眼にも、すっきりととらえやすかつたであろう。したがって、子どもたちは、日常的な明け暮れの中で、おのずから当時の社会での標準的な生き方を学習し、獲得していくことができたのである。

ここで、私どもは次のような問題に気づかされる。「児童の生活の近代化とその福祉の増進のために」児童文化という概念を成立させ、そのような運動が進められてきたこと、「児童は小型のおとなではない」という児童観が普及し、「子どものために独特の生活圏が確保されようとしたこと」は、明らかに近代のもたらした一つの成果である。

しかし、その結果、ともすれば、子どもの文化とおとなの文化は、対立関係にある二者ととらえられるようになった。そして、おとなの文化の悪影響から子どもを守るものが、児童文化の課題となってきたのである。そして、「子どもの文化」という特別なものをおとなが用意し、提供して、その中で子どもをいかに快適に生活させるかを工夫するような考え方、すなわち、「児童文化

とよばれる特殊な世界のお客様」として子どもをとらえるような態度が、一般化してきたのである。このような現状はやはり、根本的には間違っていて、ずれているとみてよいのではないか。

前々回から、子どもの文化に関しては子どもが作り手としての役割をになってきた事実にも、照明をあてて考えてきた。そして、ここでは、ドレムの物語に象徴されるような、未開社会での人間の生活を一つの範としつつ、おとなと子どもが共有する生活の中から、人間の文化は生まれ、作られていくものであり、子どもの文化もまた、例外ではないことを、考えてみたのである。

◆むすびにかえて

高度に発達した現代の産業機構の中で、おとなの生活はあまりにも複雑に分化している。子どもの眼がおとなの生活の全体をとらえることは不可能に近い。それならば、おとなの真剣に生きていく場を知ることのできない子どもが、おとなと同一の文化を共有することは困難であろうか。子どもの眼にふれる世界では、おとなはひたすら余暇の文化、息抜きの文化を楽しんでいる。そして、このようなおとなの文化からは、やはり子どもは守られるべき存在のように思える。

とすれば、現代の子どもたちは、文化の作り手でも、共有者でもなく、やはり、「かこいの中の住人」としてのみ、健やかな文

化を呼吸することができるのだろうか。

ここで、次のような具体的な生活例に照明を当てて、考えてみよう。幼稚園におけるある組の、年長児の観察記録である。

——記録A・女兒三名、砂場で遊んでいる。「お料理学校あそび」に熱中している。一人が鼻汁をたらしている。唇のところまでたらしめているが、夢中で遊んでいるので、気づかない。ほかの二人も何ともいわないで遊び続ける。

男児が砂場のふちを通りかかって、女兒の姿に気づき、立ち止まると、ポケットからちり紙を出した。「○○ちゃん、はな出てるよ」というと、ちり紙を差し出した。笑いもせず、きたながりもせず、淡々とした表情。「ありがとう」と女兒は立ち上がった。「ハハ、自分のある」とポケットからちり紙を出した。——

——記録B・男児二名で、カルタを作ることを思いつく。自分のひき出しにとんでいって、ひき出しを引き抜き、ハサミやクレヨンを出す。急いでひき出しをもとにもどそうとすると、もう一人がサッと手をのばして、下のひき出しに入っているほかの子どもが紙や箱を押さえて整理し直す。その上に、強引にひき出しをつっ込むと、下の子どもの持ちものが、くちゃくちゃになるからである。

二人とも、何気ない様子で、各々必要なものを手にして、自分の机にかえる。――

――記録C・男児が、道具箱のたなの前を通りすぎようとする。

一人のひき出しから、画用紙がはみ出ている。すっと、ひぎをついて、それを入れ直す。ほかの男児がそれを見ていて、「あ、○ちゃん、ひとのひき出しあけて」とちょっとがめる。「だつて、出たんだもん」「あ、そう」二人は、あっさり立ち去る。――

――記録D・ままごとコーナーで遊んでいた男児が、へやのすみに移動する。そこで、くじ引き遊びをやりたいらしい。いっしょに遊んでいた男児の一人が、ままごと道具(皿・ガスレンジ)を持ってくる。ほかの男児が「あ、○ちゃん、そんなもの持ってこないで」とがめる。ままごと道具をもとにもどす。それを見ているほかの男児、スツと立って行ってゴザを持ってくる。くじ引き遊びをしている場所の隣りに敷く。そしてそのゴザの上、ままごとコーナーから、皿やガスレンジを持ってきて並べる。ままごとを続けたかった男児も、こちらへ移動してきて、みんなといっしょにしながら、自分の遊びを続けることができた。――

――記録E・女児三名。ままごとをしている。皿の上に積み木を並べて、料理する。もつといういろいろな形の積み木が欲しくなって探しに行く。他のコーナーで、ままごとをしている女児グループのところまで積み木をわけてもらう。「ひどいわよ、あんたたち、そんないっぱい使って。少しちょうだいよ」とかなり強引にもらってくる。

へやの一隅に誰かが積み木遊びをしていたらしいあとがある。「ここ、誰か遊んでいますか」と、女児三名で問う。「まだ遊ぶのか、もう終わったのか」とへや中を見回す。「誰かさーん、遊んでいますか。少しもらっていいですか」と数回叫ぶ。「誰もいないらしい。じゃ少しもらいましょう」と一部をこわして、かごに入れる。相手のいる時より、むしろえんりょがちで、そこにいないかつての持ち主を尊重している。――

今、ここに、五つの記録をあげてみた。各々、場面がちがひ、行為の種類もちがうが、一貫して流れる共通性に気づかされるであろう。それは、ごく自然に出てくる、何気ない、「他人への心づかい」である。鼻汁をふいてあげようとする男児、他人の引き出しを直してあげる子ども、ままごとでもできるように黙ってゴザを敷き足す男児など、あたりまえの日常生活として、ほとんど意識にすら上っていないような形で、それらの「あたたかく、よき

行ない」が出てきている。これが、この組の子どもたちの生活の底を流れていて、独特のおだやかさ、あたたかさをかもし出している。そして、このなごやかなのんびりした風土の中で、子どもたちは、各々の活動を精一杯に営んでいるのである。

ここに見出されるような、この組のもっている独特のふんい気、あるいは生活の土壌をなすようなふるまい方の体系を、文化とよぶのは大げさにすぎるのであろうか。

エドワード・タイラーの定義するように、「文化とは、その広い民族誌的な意味においては、知識・信仰・芸術・道徳・法律・慣習その他、およそ人間が社会の成員として獲得した習性の複合的全体である」と考えるなら、そして、文化を、認識・行為・物質の各々の体系として把握されるものとするなら、これはまさしく、この組の成員の行為の体系としてとらえられる「文化」なのではないか。

そして、興味深いことに、この「組文化」は、この組の保育者のふるまい方そのままとみることができるのである。細やかに、言葉よりも行為で、たえず相手に即した「心くばり」を示すことが、この組の保育者の保育行為であった。それが、子どもの世界にまぎまぎと取り入れられて、この組の「文化焦点」となっているのである。

こうみてみると、私どもの周囲で、子どもたちは、おとなとそ

の文化を共有し、共に作り出している。子どもの生活文化は、やはりおとなの文化から独立の「かこわれたもの」として存在するのではなく、子どもの生活行為とおとなのそれとが交差した部分を、「文化」という視点からとらえたもの、といつてよいのではないか。

とすれば、子どもと文化の問題は、単に「文化財を与えること」でも、「価値の伝達」でもなく、子どもと共に作るものとして、その生活をいかに重ね合わせるにかかっていると見えるのではなからうか。

(お茶の水女子大学)

